

碧海台地東縁の古代集落

● 永井邦仁

西三河地域の中でも碧海台地東縁を対象として、古代集落遺跡の立地がどのように推移するか検討した。7世紀代には開拓集落が台地縁辺で増加傾向にあるが、8世紀前半は特に、より高燥な台地奥部への進出がみられる。その後、8世紀後葉を画期として水辺近くへの移動が本格化する。この一連の集落移動には村落首長層が伴っており、律令国家的権威を背景にしながらも在地首長層の主体的な意志がはたらいたものと考えた。

1. はじめに

律令が制定・施行された8世紀を中心とする前後数百年の間、あるいは都の所在地によって飛鳥・奈良・平安時代と呼称する7～12世紀を、わたしたちは日本列島の古代国家の時代とみなしている。それでは古代の集落に時代や地域の特徴はどのようにあらわれるのであろうか。

本稿では、愛知県内の西三河地域（矢作川中・下流域）、とりわけ碧海台地東縁における古代の集落遺跡をとり上げる。基本的には時間軸でたどりながらその変化を見出すことを目指すことにしたい。しかしながらこのような作業はどうしても建物、すなわち遺構配置の変遷にとどまってしまうがちである。そこで、地形・村落首長・信仰・生産流通の各要素に整理して集落遺跡を観察してみよう。

2. 碧海台地東縁の形状

一般的には矢作川の中・下流域における右岸と左岸は一括して西三河地域として扱われることが多い。しかしその沖積平野に立って眺めれば全く異質な地形が右岸（西側）と左岸（東側）に広がることに気づく。すなわち右岸の風景は、沖積平野の向こうに碧海台地の崖や緩斜面がみえるだけであるのに対し、左岸は丘陵の端部の斜面が舌状に張り出し、いく筋もの谷が背後に迫る山地に向かってのびる風景である。単

純化すれば右岸の原野と左岸の山という対比である。この違いに過去の人々が全く無頓着であったとは考えにくい。例えば古代に近い時期では、古墳時代後期の横穴式石室墳の分布をみると右岸の碧海台地よりも左岸丘陵地の方が圧倒的に多い。偏在の理由は様々考えられるであろうが、当該期の流域の人々が墓域の設定にあたって地形に代表される環境に大きく影響されたことは想像できよう。このことから、墓制以上に周辺環境を考慮したと想定される集落を立地の観点から検討するとき、同流域においては右岸と左岸を別個に扱うことが前提になる。まずは遺跡の発掘調査成果が蓄積された右岸碧海台地東縁から検討を始めたい。本稿の表題もここに発している。

碧海台地は地形分類による中位段丘の碧海面のことで、上位段丘の挙母面、下位段丘の越戸面と区分される。概ね挙母面は豊田市北部の古代賀茂郡西部に相当し、碧海面は豊田市南部から安城市・刈谷市に広がり古代碧海郡に相当する。越戸面は上・中位段丘に付随して局地的にみられるが、その分布は豊田市南部が南限である。碧海面の標高は豊田市南部で23～38m、南へ16km下った安城市南部で12mであるから平坦な地形であることが判る。

さて、碧海台地の東縁は高低差が5m以上ある明瞭な段丘崖が多くみられるが、越戸面と組み合うと階段状となり、開削の進んだ現在では緩斜面となる部分もある。また微細にみれば平坦面が崖面に突入するところがあれば緩斜面があつてその先に崖面となるところもある。

そして最も注目すべきはその崖線である。地形分類図はもとより明治 24 年陸軍参謀本部陸地測量部作成の地図において土地利用の違いや等高線の展開を拾っていくとその特色は明瞭である（図 1）。すなわち豊田市南部では単調な崖線が続きそこから台地へ入り込む谷地形は少数であるのに対し、岡崎市・北野廃寺跡から南側の安城市域では大小の谷地形が頻繁に台地に入り込み、その一部は谷奥でさらに分岐して複雑な小支谷を呈する。谷奥の状況もさまざまであり、谷地形を視認できるところもあれば埋没が進んで台地上の窪地にすぎないところもある。

この崖線に遺跡の位置を示すと、古代以前の集落においてはほとんど崖線と谷地形から離れることがないことが判る。例えば単純化された地形区分では台地奥に位置する安城市・御用地遺跡も詳細にみれば谷地形に面する。このことから、台地縁辺に形成された大小の谷地形が、集落維持のために必要な生産活動の場となっていたことがうかがえる。さらに谷地形を取り囲む台地は山林ないしは原野であったと考えられるが、これらを採集あるいは開墾の目的で利用していたとすれば、小支谷が多いほど利用可能な台地縁辺の面積は増えることになる。程よい長さや広さに加えて複雑な谷地形ほど中核的な集落が形成されやすかったものと推察される[※]。遺跡の分布から、この傾向が碧海台地東縁で明瞭になってくるのは弥生時代中期後葉あたりと考えられる。そして後述するように古代の集落に至るまでそれはより顕著になっていったのである。

3. 古代集落の画期

次に碧海郡北部での調査事例をもとに、古代における集落の変遷とその画期を検討してみよう。遺跡は豊田市渡刈町・水入遺跡である。

水入遺跡は、標高 22～24m の碧海台地縁辺に立地し、遺跡の中心に矢作川へ開く幅約

[※] 安城市・古井堤遺跡をはじめとする古井遺跡群は、後背に長い谷地形が控えた弥生～古墳時代の拠点遺跡である。ここは沖積地上に広がる遺跡であるが、谷地形と深い関わりがあると考えられる。

100m の谷地形がある。この谷地形は江戸時代には埋没し小河川（宝蔵川）となっていたが、字名はここを境に北の下糟目、南の大屋敷に分かれる。本稿でもこの字名を地区名として使用し、前者については小谷を挟んで低～高位の下糟目 A 地区、低位の下糟目 B 地区と呼称する。

水入遺跡では、縄文時代中期後葉に崖線付近が集落地となった。崖線から離れた台地面に進出するのは弥生時代末期であるが、このときは大屋敷地区のみである。その後古墳時代前期末から大溝の開削に始まる集落の形成がみられるが、その大部分は大屋敷地区に収まる。5～6 世紀の集落は、大溝や崖線下から圧倒的な量の須恵器・土師器が出土し、土師器甕には煮炊の痕跡が認められるにもかかわらず、竪穴建物跡は数棟検出されたにすぎない。そのため集落の建物は掘立柱建物が中心であったと想定しており、7 世紀の竪穴建物に先行する柱穴も検出されている。しかしながら想定される平面が正方形の総柱建物は古代の倉庫である可能性もあり、確定的ではない^{※※}。

竪穴建物で構成される集落が再び大屋敷地区で広がり始めるのは猿投窯須恵器編年^{※※※}の H-44 号窯期（6 世紀末～7 世紀前半）である。調査範囲内では、以後 9 世紀前葉まで一定量の遺構・遺物が検出され、寡少ながら 10 世紀代の灰釉陶器も出土した。しかし 11 世紀代の遺物は出土せず、ここに断絶をみる。そこで本稿では 7～10 世紀の集落を古代の集落とする。

次に水入遺跡の古代集落における画期を考える。集落の画期を設定するにあたっては、建物遺構の時期別配置状況などを通じて、土地利用の観点から考察されることが多い。一定量の出土遺物によって時期特定が可能な建物跡の時期別変遷を図化したものが図 2 上である。

7 世紀代に大屋敷地区に展開した建物群は、7 世紀末～8 世紀初頭（I-41 号窯期）に下糟目 B 地区にも広がり始め、8 世紀前葉（C-2 号窯期）

^{※※} 古墳時代中期の掘立柱建物については松井 1995 に提示された 2 間×2 間規模のものを想定した。掘立柱建物の認定とその時期は、問題が生じやすかつ集落景観を根本的に覆す可能性をもつ。本稿ではそれを前提としたうえで（竪穴建物についても同様であるが）、報告書で提示した建物の中からさらに確定的なものに限定して論を進める。

^{※※※} 須恵器の年代観は愛知県史編さん委員会 2010 による。

本図は、明治24年陸軍参謀本部測量部作成の地図をベースに、その等高線と示された土地利用(水田と畑・山林・市街地)の境界を概ね段丘崖・谷地形の境界ととらえ、その後の地形分類を参照して崖線を記入したものである。ただし矢作川右岸の碧海台地に限定した。

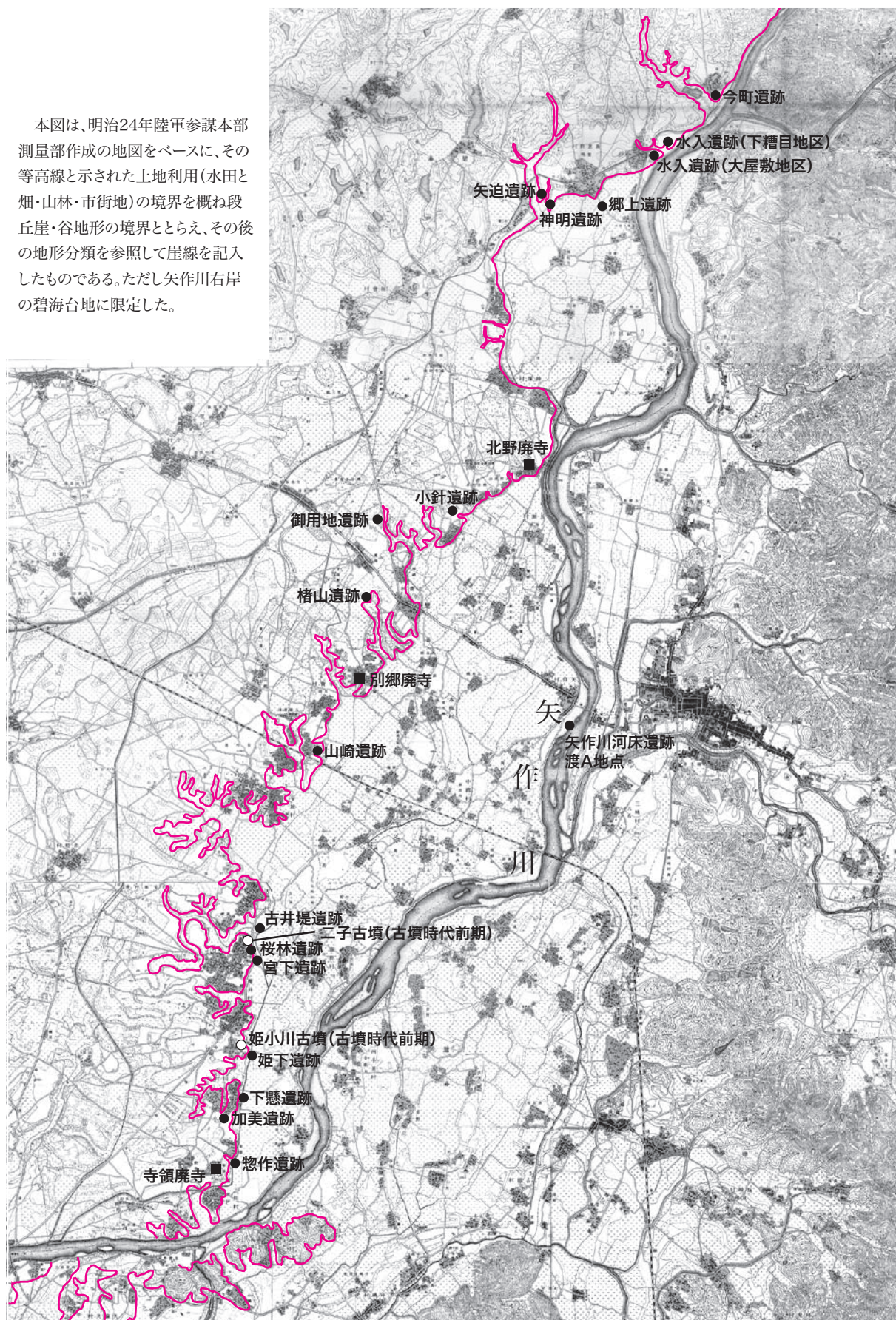


図1 碧海台地の崖線および谷地形と主要古代集落遺跡

には下槽目 A 地区に建物群を見出せる。その一方で大屋敷地区の建物は 7 世紀末段階ではほとんどみられなくなり、遺物も 8 世紀前葉までである。加えてこの時期に変化がみられるのは集落立地が、より高燥な台地の奥部にまで分け入っていることである。下槽目 B 地区は矢作川に近く水辺との高低差も大屋敷地区と同じであるが、下槽目 A 地区は標高 23～24m で水辺から離れている。一つ目の画期は 8 世紀前葉に求められよう。

その後 8 世紀中葉 (I-25 号窯期～NN-32 号窯期) にかけては同様の集落立地であるが、8 世紀後葉～9 世紀初頭 (O-10 号窯期) には、下槽目 A 地区南端、遺跡中心の谷地形の水辺近くで建物遺構の重複が多数みられ、高燥な台地には建物の分布がみられなくなる。これが 2 つ目の画期である。なお、掘立柱建物の居宅は 8 世紀中葉から登場するようであるが、集落建物の主体はあくまで竪穴建物であった。

4. 7 世紀の集落

地形 集落は、古墳時代中～後期の集落から継続する立地または先行集落のない崖線付近である。前者の場合、継続性の高い拠点集落という評価がなされることが多い。集落の消長 (図 2 下) のみをみれば豊田市・神明遺跡、岡崎市・小針遺跡が該当するが、内実はどうだったのか個別の検討も必要であろう (図 3-(2),(3))。いずれにせよ立地に限定すれば、谷地形の入り口付近に展開する点は共通する。一方、開拓集落ともとれる後者の例としては安城市・御用地遺跡が挙げられる。小針遺跡南側に開く谷地形で、そこから 600m 奥に位置するが、7 世紀の集落は崖線 (調査区の東縁) に沿う (図 3-(1))。

村落首長 この段階におけるムラの首長の存在は水入遺跡では明瞭ではない。神明遺跡や御用地遺跡でもそうだが、7 世紀の竪穴建物に顕著な大小がみられない^{*}。しかし小針遺跡では掘立柱建物で構成される一角があり、首長の存在がうかがえる。調査区外に存在した可能性も充分にあるが、ごく一部の拠点集落を除きほとん

^{*} 神明遺跡や御用地遺跡の 7 世紀代の集落では、一辺 5～6m 級が標準で、7m を超えて突出した規模のものはない。

どの集落では、特に 7 世紀半ばまでは階層差が視覚化される状況ではなかったようである。

信仰 仏教関連の信仰遺物はまだ出現していない。99ASB15 からは、古墳時代的な小型鉢が出土した。口縁が傾斜しており特殊な用途が想定される (図 3-(5))。

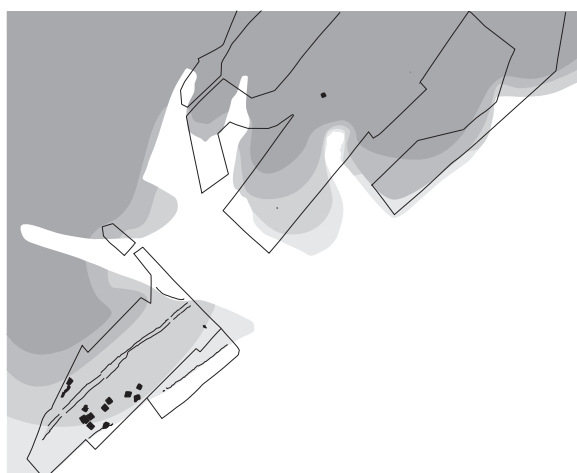
生産と流通 管状土鍾は、河漁の網に付けたものと考えられている。碧海台地の古代集落では一般的な生産用具という印象があるが、広く出土する集落遺跡とそうでない遺跡がある。水入遺跡や神明遺跡では 7～8 世紀の竪穴建物跡からは普遍的に出土し、古代集落における食料獲得のひとつの柱になっていたともいえる (図 3-(4))。一方で碧海郡南部の御用地遺跡や安城市・加美遺跡では出土数は少ないようである。これは後者が谷地形を奥に進んだ立地にあることと大きく関わるともとれるが、その付近の低地の発掘調査においても土鍾が多数出土した事例を聞かない。このことは碧海郡北部と南部での小地域差ともとれ、今後検討が必要であろう。

7 世紀代に碧海郡を中心に器壁の薄いナデ仕上げ土師器甕が出現することについて以前指摘した (永井・川井 2005)。水入遺跡 99ASB15 の 2103 や神明遺跡 SB216 の 11 はその初現である (図 3-(6))。このタイプの甕が碧海郡内で目立ち始めるのは 8 世紀に入ってからであるから、それまでは流通範囲が狭かったのであろう。

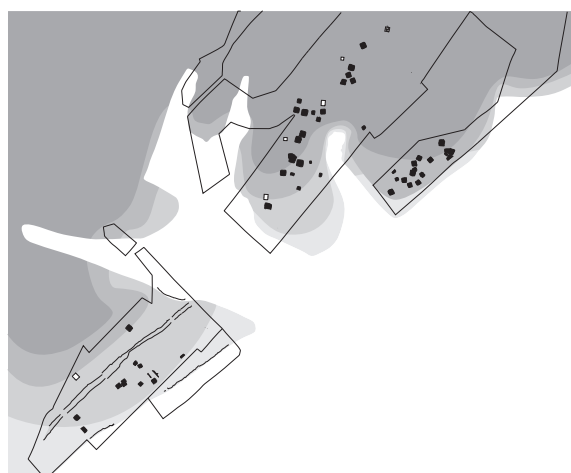
5. 7 世紀末から 8 世紀前葉の集落

立地 集落が崖線付近を横方向に移動・拡大する時期である。まず 7 世紀末～8 世紀初頭の水入遺跡では、谷地形を越えて下槽目 B 地区での建物が中心となっていく。開墾によって利用可能となった土地は増加したと考えられるが、居は基本的に川や低地に近い場所を指しており、前代と大きく変わることはなかった。

高燥な台地に集落が移動したのは 8 世紀前葉である。下槽目 A 地区は、幅 10m に満たないごく小さな谷地形に挟まれた舌状台地であり、その中心を通る尾根筋から南東側斜面が主に新しい居住地となった。



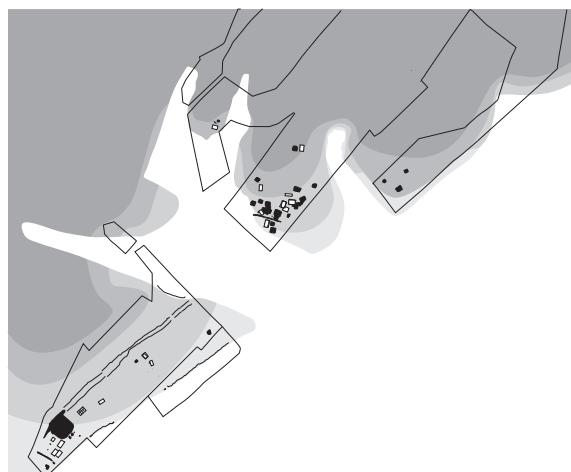
(1) H-44 号窯期～I-17 号窯期 (6 世紀末～7 世紀後半)



(2) I-41 号窯期～C-2 号窯期 (7 世紀末～8 世紀前葉)



(3) I-25 号窯期～NN-32 号窯期 (8 世紀中葉)



(4) O-10 号窯期～H-72 号窯期 (8 世紀後葉～10 世紀後半)

* 水入遺跡の古代建物のうち、出土遺物があるなど
詳細な時期区分が可能なものを抽出した。

0 1:7,000 400m

		6 世紀	7 世紀	8 世紀	9 世紀	10 世紀
碧海郡北部	今町遺跡		■	■		
	水入遺跡 (下糟目 A 地区)			■	■■■■	
	水入遺跡 (下糟目 B 地区)			■		
	水入遺跡 (大屋敷地区)	■	■	■	■■■■■	■■■■■
	郷上遺跡	■	■	■	■	■
碧海郡南部	神明遺跡・矢迫遺跡	■	■	■		
	小針遺跡	■	■	■		
	御用地遺跡		■	■		
	姫下遺跡			■	■	■
幡豆郡	加美遺跡		■	■		
	八ツ面山北部遺跡群		■	■	■	■
	寄名山遺跡		■	■	■	■

図2 水入遺跡古代集落の建物変遷と碧海郡・幡豆郡の主要古代集落の消長 (永井 2010 を改変)

水入遺跡以外でもこの時期には集落がより高燥な立地へと転換する事例がみられる。拠点集落と目される小針遺跡では、比較的早い段階から崖線より奥まった台地にも建物が進出していたが、8世紀前葉の集落は7世紀の集落から現況標高で2～3m高い地点で検出されている。

村落首長 状況に変化があらわれるのが7世紀後葉である。水入遺跡では崖下の堆積層(98C2SX01)から暗文のある土師器蓋・盤が出土しており、出土地点付近の大屋敷地区にその使用者がいたと推測される。村落構成員の所有物に階層差が生じ始めた段階である。

小針遺跡の8世紀に集住が進む高位地点[※]は、7世紀の集落の中でも掘立柱建物の比率が高かった場所であり、もともと首長層の居住地であったところと考えられる。そこに東西棟の建物と倉庫とみられる総柱建物が並ぶ様相はまさに官衙風である。このように首長層の居宅を中心に計画的で集住的な集落建設を進めた時期であると評価されよう(図3-(3)、図4-(5))。

信仰 神明遺跡では、崖下の瓦窯(神明瓦窯)で北野廃寺向けの瓦を生産するとともに、台地上でも瓦が出土することから、その場でも使用していたと考えられる(図3-(2))。それが寺院なのか首長居宅なのかは不明であるが、もし前者であるとすれば村落内寺院の初現的な形ととらえられる。すなわち北野廃寺のような定型的な伽藍配置の寺院に次いで、塔は建立されたが統一的な伽藍配置が疑問視される豊田市・舞木廃寺、安城市・寺領廃寺クラスの寺院、そして安城市・別郷廃寺のように礎石建ちの堂の可能性はあるが塔跡が不明な寺院、と序々に「手の届きそうな」ランクの寺院建立に転換していく中で、集落が主体でありその内部に仏教施設を取り入れた形態が登場したと想定されるのである。

生産と流通 大屋敷地区では寡少であった製塩土器が竪穴建物跡から出土する例が増加する。98DSB16ではその脚部が8点も出土している。ただし竪穴建物廃絶後の覆土中への廃棄であることや、下糟目B地区でのC-2号窯期須恵器との共伴例が少ないことを考慮すると、むしろ

8世紀中葉の集落に関わるものと考えられる。

流通に関して注目されるのは、この時期まで濃尾型土師器甕が少数ながら混在していることである。同甕はハケ調整長胴甕であり、一部在地での模倣生産も考えられるが碧海郡域外からの搬入が専らであっただろう。その理由は、この時期の西三河地域における、造り付けカマド固定用の薄型長胴甕生産が小規模で需要に追いつかなかったためと考えられる。西三河地域では7～8世紀の竪穴建物跡で明確な造り付けカマドが検出されない例や土製の移動式カマドが出土する例が多数報告されており、各種の火処とそれに対応する煮炊具がそれぞれ一定のシェアを占めていたと考えられる。

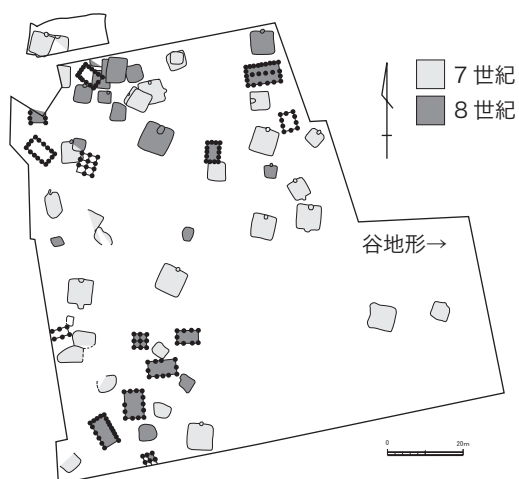
6. 8世紀中葉の集落

立地 8世紀前葉に下糟目A地区の開墾によって形成された集落は、ややその範囲を低位側に拡大させながら同様の場所に立地した。この時期の建物は掘立柱建物が混在し始めることが注目され、それと一辺3m以下の小規模な竪穴建物との組み合わせが想定される。それによると、集落の建物は緩斜面に雛壇状に配置され、水入遺跡の場合、概ね2列構成になっていたと考えられる。

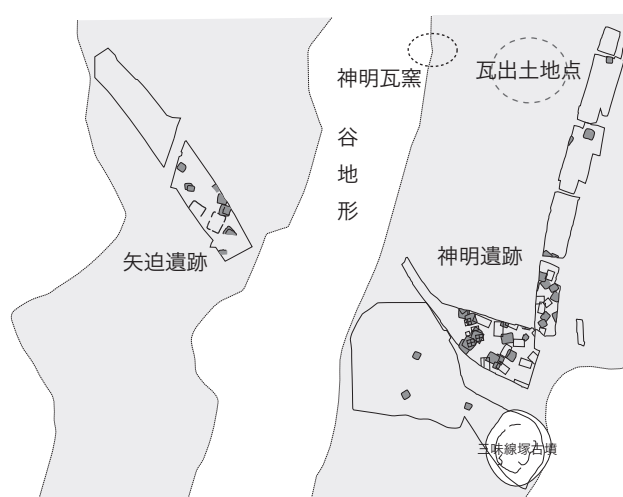
村落首長 掘立柱建物98DSH36・37は、3間×5間の南北棟で下糟目地区では98DSH02に次ぐ規模である。その南側には一辺が約3mの竪穴建物98DSB38・39があり、土師器皿・ミニチュア土器・鈔帯金具(巡方)が出土した(図4-(1)、(2))。建物規模や特殊品の存在から村落首長層の居宅であった可能性が考えられる。また先述した製塩土器の集中的な出土も首長層居宅に関連する可能性が高い(森2010)。この居宅は下糟目A・B地区を隔てる小さな谷に面している。同時期の建物は、前代に開拓したやや高位な地点にも所在していることから、必ずしも首長層は視覚的に高位に陣取るわけではなく、むしろ水辺へのアクセスはしっかり確保していたことを示している。

水入遺跡ではこの段階になって、建物と所有物の両面から明確な村落首長層の登場となる。鈔帯の所持は名誉的な意味合いが強くしかも不

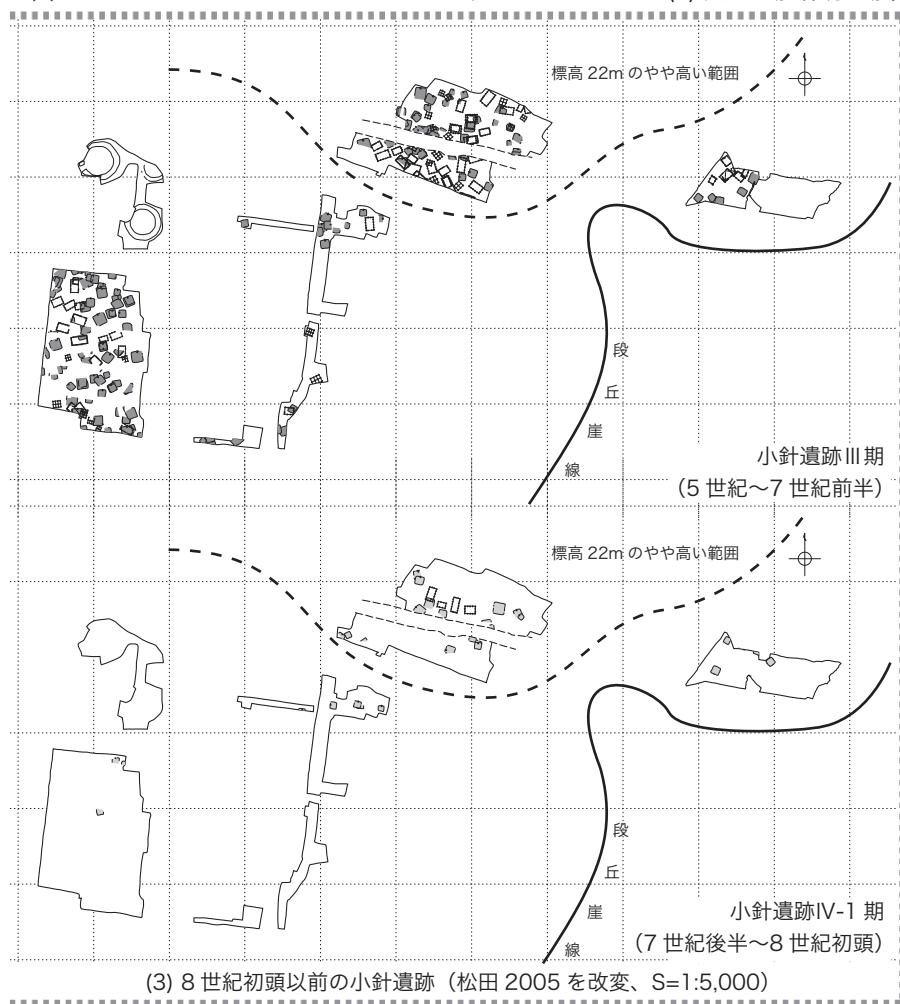
[※] 岡崎市教育委員会の調査区B-2区、C区が該当する(斎藤・荒井1999)。



(1) 御用地遺跡 (安城市 2004 を改変、S=1:2,000)



(2) 矢迫遺跡・神明遺跡 (永井2010を改変、S=1:4,000)



(3) 8世紀初頭以前の小針遺跡 (松田 2005 を改変、S=1:5,000)

99ASB15
(7世紀後半)
太い
端面成形
砂粒有

2121

98DSB44
(8世紀前葉)
やや細く長い
端面なし
砂粒有

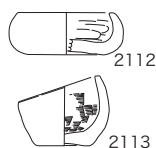
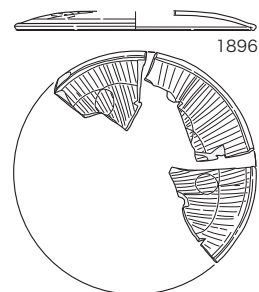
2564

99DSB11
(8世紀後葉
～9世紀初頭)
細い
砂粒少

2257

0 (1:4) 10cm

(4) 水入遺跡における
管状土錘の変遷



(5) 水入遺跡 99A 区 SB15
出土の特殊器形土器



(6) 7世紀後半に登場した薄型土師器ナデ甕
0 (5)～(7)1:8 20cm



(7) 水入遺跡大屋敷地区の
段丘崖下出土の暗文土師器

図3 7世紀から8世紀初頭の集落様相

揃いな状態であったと推察されるが、少しでも「都ふう」の暮らしを演出することで首長の在地での存在意義は充分示せたのであろう。

小針遺跡の主要掘立柱建物は報告書（斎藤1999）によるとIV-2期（8世紀前半）までとされているが、遺物が寡少であることから時期決定はなかなか難しい。一部はIV-3期（8世紀後半）まで存続したと推測される。しかし竪穴建物数は大幅に減少することから、高燥な台地上からの撤退はすでに進行中であったのかもしれない（図4-5）。

信仰 金属器写しの須恵器碗が99E区SK192から出土している。また付近には2間×3間の掘立柱建物（99ESH01）が単独で立地する。近接する廃棄土坑（99ESK475）からは黒色付着物のある碗や、遺跡内では数少ない須恵器高盤が出土した。この建物の特殊性を示すものであるが、仏教信仰を示すまとまった遺物の出土ではなく、性格の特定には至らない。

生産と流通 この時期には、規格化された三河型土師器甕の流通が始まる。出土数が顕著でないのは口縁まで薄手に作るために見つかりにくいためである。カマド固定用の甕としてはやや強度が足りなかったかもしれない。この後に登場する口縁がL字形に屈曲するタイプは、その点を改良したとみられる（図4-3）99DSB20-2302）。

7. 8世紀後葉から9世紀前半の集落

立地 竪穴建物は下糟目A地区の水辺近くの低位部分に集まる。竪穴建物跡は複雑に重複する傾向にあり、平面形が長方形となるものもみられる。99DSB20・21は、それぞれ個別の竪穴建物として検出されたが、壁面を接しかつその接点で被熱によって赤変したカマド状の炉跡を2基確認した。このような炉跡は遺跡内ではここだけで、厨房のような機能があったのかもしれない（図4-1）。

村落首長 98DSH02は出土遺物が少なく時期特定が難しいが、東側に位置する竪穴建物98DSB66からはO-10号窯期古段階の須恵器蓋が出土した。先の98DSH36・37に引き続く首長層の居宅である可能性もある。

そしてさらに崖線近くの99DSB20・21の付近では東西棟と南北棟がL字形に配置された掘立柱建物群（99DSH11～14、図4-1）がある。建物の南側にはちょうど台地縁辺を示すかのような位置に溝（99DSD05）が掘削される。この溝は開口していた時間は短かったとみられ遺物がほとんど出土しなかった。調査時に詳細な情報を得ていなかったのは要反省であるが、板塀を立てるための掘りかただった可能性が考えられる。この溝はO-10号窯期須恵器が出土する竪穴建物の覆土をことごとく掘り込んでおり、時期的にも最終段階に存在したと判断される。

溝南側の崖線下からは、ミニチュア横瓶・把手付杯・高盤といった、古代集落遺跡の出土遺物としてはやや特殊な部類に入るものが比較的まとまって出土した（図4-3）。また水入遺跡では数少ない墨書のある灰釉陶器碗もある（図4-3）1991）。灰釉陶器はK-90号窯期で、古代集落の遺物としては最も後発のものとなる。この段階まで村落首長層がこの地に居住していたことがうかがえる。

信仰 下糟目A地区南端と同様の立地である大屋敷地区南端には竪穴建物群はみられないが、古墳時代中期開削の大溝に隣接する船着き場と掘立柱建物（99ASH35ほか）がつくられた。これらの南側に区画溝（98B2SD02）が掘られる。溝からはO-10号窯期古段階以降の須恵器が出土し鉄鉢形須恵器や長頸瓶が仏具であったと考えられる。また船着き場遺構などからは「公寺」墨書の須恵器が複数出土し、やや時期は下るが遺跡で唯一の緑釉陶器皿が出土した。掘立柱建物の北側には瓦塔片がまとまって出土したことから、ここに建立されたと思われる（図4-4）。

寺の建立主体は現状では村落首長層が念頭にあるが、「公寺」と名乗る点や周囲に同時期の建物がほとんどみられない点、さらに船着場を伴い外部へのアクセスも良好である点を考慮すると、別の主体があった可能性も考えられる。

生産と流通 管状土鍾はこの時期もみられる。ただし形態がきわめて細くなり胎土もこのころから大量生産に移行したと考えられる三河型土師器甕（図4-3）2302）とよく似た精良な粘土

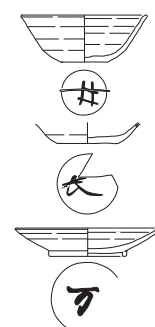
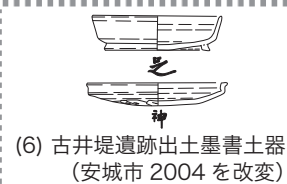
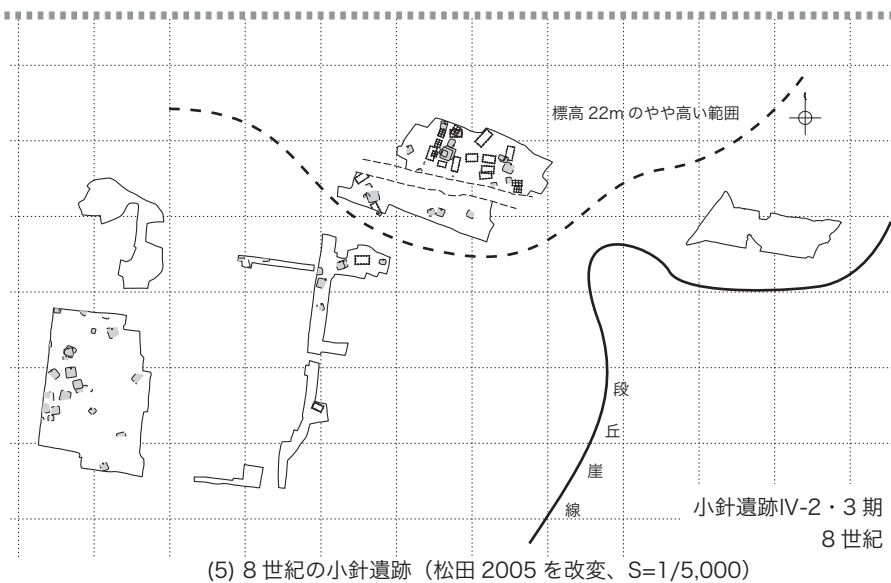
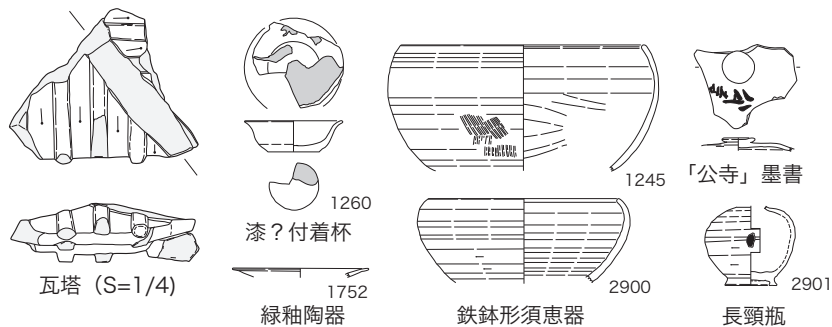
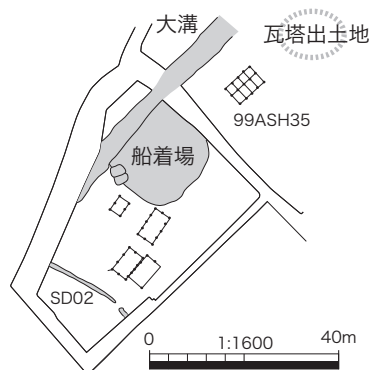
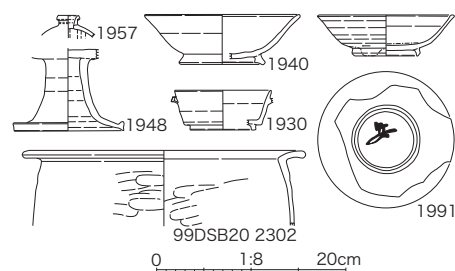
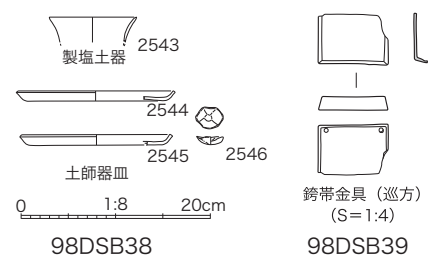
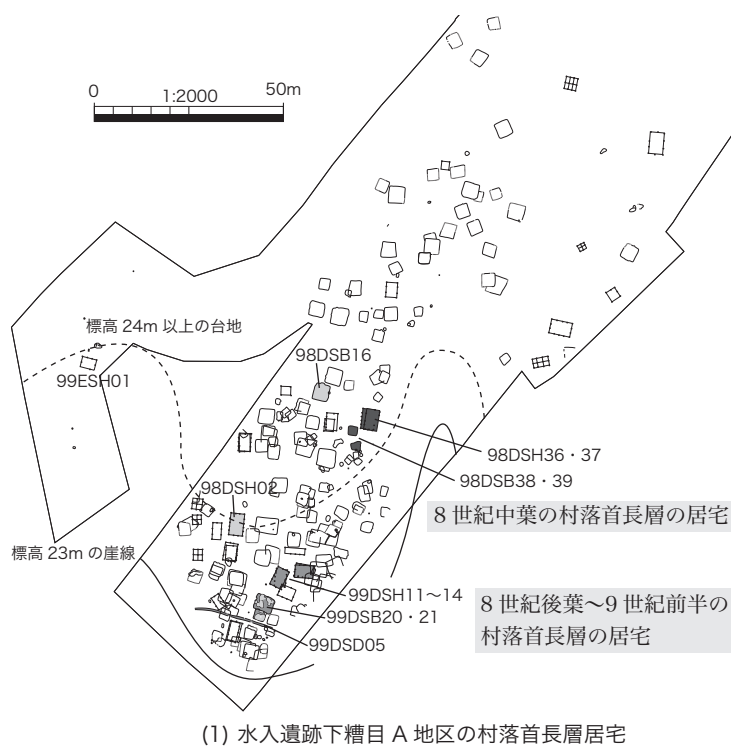


図4 8世紀代古代集落の様相

である。その三河型土師器甕は、限定的な環境で採取された粘土と高い規格性で製作されたことが示されており、碧海郡域がその最大候補地とされるが（永井・川井 2005）、水入遺跡出土の同甕はいずれも使用痕跡があるので、ここは生産・搬出地ではなかったようである。この時期の三河型土師器甕は三河国全域から尾張国南部まで流通しており、国衙の関与が大きくなったものと考えられる。すなわち在地首長層の意志を超えたところから生産と流通をコントロールする存在がこの時期になって確立したといえるのである。

8. 古代集落の特色

以上、碧海台地上の遺跡を素材に古代集落の変遷を述べてきた。ひじょうに散漫な指摘であり、見落とした点が多いと思われるが、特に村落首長層の動向に注意して観察することで、集落移動の主体が何であったかを考えてみたい。

水入遺跡では8世紀中葉に明確化した村落首長層であるが、遺物からは8世紀初頭には集落の中で一体となっていた様子がうかがえる。つまり7世紀末に端緒をなす高燥な台地上の開拓は村落首長層の意志が強く働いていたものといえ、地域の構成員が勝手に原野へと分け入ったのではないと考えられる。しかも開拓地での集落建設は場所が限られてくる。結果、建物配置は比較的まとまっていく。

小針遺跡の集落動向や安城市・古井堤遺跡で出土する墨書土器をみると、8世紀中葉段階から既に碧海郡南部では高燥な台地からの撤退が始まり、沖積地上の集落へと中心が移っていた

可能性が考えられる（図4-(6)）。このような遺跡は上位の首長層に関わるためかもしれないし、比較的早い段階から開拓が進んだ結果、台地上が「し尽くした」状況に陥った可能性もあるだろう。

ともあれ結果的に碧海台地上での集落は大幅に減り、沖積地上の集落が増加傾向に転じる。豊田市・郷上遺跡は崖下の沖積地上に展開する古墳時代中期以降の集落であるが、8世紀中葉の断絶時期を経て8世紀後葉～10世紀代に継続する。瓦塔が建立された仏教信仰空間を内包するが、墨書土器には「長」もあり、村落首長層の居住も推測される。また岡崎市・矢作川河床遺跡渡A地点でも墨書土器や緑釉陶器が多数出土しており、沖積地上にさまざまな拠点が発達した時期であったことが判る。

ところで、西三河地域における沖積地上の遺跡については未発見のものもあると見込まれ、台地上での集落減少が単純に地域外への転出という図式にはならない。しかしながら幡豆郡の丘陵地端部や賀茂郡東部山間地域における当該期遺跡数の増加をみると、碧海台地と谷地形の開発からそういった地域の開拓への転換があった可能性は否定しきれないと思う。その場合、大きく本貫地を離れることになるわけで、村落首長層の意志というより郡司層あるいは三河国衙の意志があったものとも考えられる。それは三河型土師器甕の生産・流通が8世紀後葉になって律令制三河国を単位とするようになったこととも関連するのではないだろうか。こうして、古代集落がより時代性を強く示すようになる時期を8世紀後葉以降と見通したところで擱筆したい。

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2010 『愛知県史資料編考古4 古代』 愛知県
安城市史編集委員会 2004 『新編安城市史5 資料編古代・中世』 安城市
安城市史編集委員会 2004 『新編安城市史10 資料編考古』 安城市
岡安雅彦 1996 『御用地遺跡』 安城市教育委員会
斎藤嘉彦・荒井信貴ほか 1999 『小針遺跡』 岡崎市教育委員会
酒井俊彦 2003 『郷上遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁・川井啓介ほか 2005 『水入遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2010 「西三河の古代集落」 菊池徹夫編『比較考古学の新地平』 同成社
松井一明 1995 「古墳時代の掘立柱建物について」『古墳時代の集落 収録集』 静岡県考古学会
松田 訓ほか 2005 『小針遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
森 泰通ほか 2001 『神明遺跡II』 豊田市教育委員会
森 泰通 2010 「東海地方における古代土器製塩覚え書き 2009-内陸部から出土する製塩土器の意味を考えるために-」『東海土器製塩研究』 考古学フォーラム